



Title	本当は身近なグローバルライフ
Author(s)	林, 若可奈
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 149-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55585
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

5-4 本当は身近なグローバルライフ

林 若可奈 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了

本セミナーのテーマは「グローバルに生きる!」ということで、私の発表タイトルも「本当は身近なグローバルライフ」としていますが、実際には、自分なりに考え続けてきた「異文化理解とはなにか」、「多文化共生とはなにか」ということについて、GLOCOLとの関わりや大学院修了後の仕事などを通して見えてきた一つの答えのようなものを少し、述べさせていただきます。

1. 略歴

まず自己紹介がてら略歴をご紹介します。大学では国際協力について学び、カンボジアで運動会を開催する学生ボランティア活動に参加したり、カンボジアの初等教育における落第と退学について研究したりしました。卒業後に協力隊を受験するも健康診断で不合格。教育分野に強い関心があったことから、屋久島に設立されたばかりの広域・通信制高校に勤めることになり、不登校や非行、発達障害などの課題を抱える高校生へ新しい形の教育を提供する仕事に携わり始めました。その1年後には、福岡にある指定サポート校に異動となり、そこで3年間勤めましたが、もう一度国際協力のことを学びたいという気持ちがあったため、2010年4月に大阪大学人間科学研究科グローバル人間学専攻に入学しました。大学院では、大学時代から縁のあったカンボジアの首都プノンペンをフィールドとし、急速な社会発展の裏にある高校教育の課題について、学校をさぼるという高校生の行動に焦点を当てて研究しました。入学してすぐに、副専攻プログラムを通してGLOCOLと出会い、2年間みっちりお世話になることとなります。大学院修了後には、これもGLOCOLが見つないでくれたご縁なのですが、大阪大学がある豊中市で多文化共生指針を作るお手伝いをする事になり、一年間の臨時職員として人権文化部人権政策室という

ところに雇われました。在職中に改めて協力隊を受験したところ、青少年活動という職種で合格したので、2013年から2015年までの2年間、中米のニカラグアの首都に派遣され、この7月に帰国しました。

2. GLOCOLとの関わり

在学中のGLOCOLとの関わりというのは、大きく分けて3つありました。一つは学部・研究科を超えて参加することができる大阪大学独自の副専攻プログラムで、その中の「グローバル共生」と「人間の安全保障と開発」という2つのコースを履修していました。もう一つは、2011年にGLOCOLの教育プログラムで海外フィールドスタディが立ち上がり、そちらでフィリピンに行かせてもらえることになりました。この年の3月に東日本大震災が発生し、世界中の人々から多くのご支援をいた



だいたということと、フィリピンが日本と同じような災害大国だということで、ツアーのテーマは「開発と防災」ということになり、フィリピン大学で「GLOCOLセミナー；開発と防災」を開催し、参加学生と教員が日本人の立場からこの大震災後の半年を振り返るというプレゼンを行いました。

また、災害によって住処を追われ再定住した先住民アエタ族の村に滞在させていただいたり、JICAが技術支援した国立防災センターを見学させていただいたり、滅多に立ち入ることのできないADB(アジア開発銀行)の内部を見学して職員の方々から講義をしていただいたり、今から考えると阪大生でなければ経験できなかったような体験をたくさんさせていただきました。3つ目は、GLOCOLが管理する学生のための施設で先生方のお手伝いなどをするティーチングアシスタントとしての関わりでした。

3. なぜGLOCOLに惹かれるのか

さて、では私がなぜこんなにもGLOCOLのやることに魅力を感じていたのか、ということは今、振り返ってみますと、次の3つのGLOCOLらしさが思い浮かびました。

まず、「現場主義」であることです。GLOCOLはその学際横断的な立場を

活かして、様々な分野の学生を海外インターンやフィールドスタディに送り出し、現場で、自分たちの目で、体で、どうやったらその学びが現場に活かされるのかということを考えさせたり、現場で活躍している方々を積極的に招き寄せてセミナーをしたり、とにかく「現場」にこだわっているという印象がありました。実際に、先生方もしょっちゅう海外や現場に行かれていて、GLOCOL事務室の予定表は出張者だらけという光景もよく見ました。(笑)次に、「実践主義」であることです。これは、先生方自身が実践者であるとともに、学生たちを指導する際にも、体験させ、考えさせ、そこから身につけていくという方式をとっていることに特徴づけられていると思います。GLOCOL関係の授業はいつも刺激的で、予想していなかった問いが投げかけられることもよくあり、すぐく頭をつかしたことを覚えています。最後は、やはり先生方の「熱意」が半端ないことでしょう。こんなことを言っているのかわかりませんが、こちらが「子どもか!」と思うくらい先生方自身が好奇心・探求心旺盛で、一生懸命でした。その熱意なくして、GLOCOLの挑戦的ともいえるプログラムは成し遂げられなかったのではないかなと思います。

4. GLOCOLで学んだこと

そんなGLOCOLから学んだこととは、いったい何だったのでしょうか。大学院修了後に働く中で気づいたいくつかのキーワードがあります。

そのうちの一つは多角的視点を持つということです。国際協力の実践者にとって、部外者である援助者と現場の人々の視点をどのように重ねていくかということは、とても大事なことです。特に協力隊として活動していた際には、私のひとりよがりな活動にならないようにするために、ニカラグアの人々の視点や考え方を知るだけでなく、時には日本人の常識を取っ払って、発想を逆転して答えを探す必要もありました。発想を逆転することは他者の目を借りるということであり、自らの無知を自覚

し、未知なるものを受け入れる余地を持つことでもあります。そうしたやり方を、GLOCOLの授業で学問分野を超えてディスカッションしたり、体験型フィールドスタディなどで現地・現場の方々から直接話を聞いたりする中で身につけていったのだと思います。

そして最後のキーワードは理論と実践です。これは好きだった授業科目名でもあるのです



が、行動することによって理論を再発見することができるという気づきです。今までに述べた学びというのは、大学院修了後に、実践してようやく自分の言葉や感覚としてかみ砕くことができたものです。つまり、学びとはそれだけで役立つものではなく、実践を通して初めて実体的な理論として理解されるわけです。そしてまた、実践するために行動することで現実中存在する多くの例外にも直面することができるので、そこから新たな発見が得られ、理解が深まっていくものなのではないでしょうか。

これらのことを直接テーマ立てて学んだということではなく、GLOCOLとの関わりを通して、このように考える力を身につけることができたのだと思います。そしてこれらのキーワードは「異文化理解」とはなにか、という何度も立ち上がってくる問いについて考える機会も与えてくれました。



(上)ゴミ山のスラムで暮らす家族へのインタビュー。フィールドスタディにて。
(下)伝統医療に使われる木の枝。医療観の違いは現地ではしか体感できない。

5. 後に続く問い

続いて、GLOCOLや研究科からの様々な学びがその後の私に与えてくれた「問い」についてご紹介します。

「異文化理解ってなんなのか？」

「多文化共生ってなんなのか？」

「グローバルってそんなに日常と乖離しているのか？」

これらの問いは動く中で何度も目の前に現れてきた問いです。もちろんそれぞれについて、授業などを通して、“一つの解答例”としての説明や解釈を聞いてきたはずですが。例えばGLOCOLのチラシには、「グローバル共生社会とは、異なる文化、言語を持つ人々が相互に承認しあい、共存することが可能になっている社会」と書かれています。でも、実際のところ、どういふものなんだかよくわかりません。(笑)授業を通して、多くの実践者の方々がこれらのテーマについて語っていらっしゃいましたが、現場でも、理想を追う中に常に葛藤があり、模索し続けている様子がかがわれました。在学中はそうした意見や解釈をききながら、一般の人たち

上には理解したような気になっていたのですが、実際に現場に出てみると、これらの問いがいかに深く難しいものであったかを実感することになります。

6. ふたつの目線から

大学院修了後は、偶然にも、対極的な二つの立場で働くことになりました。一つは、行政・政策立案者としての豊中市役所の職員で、この時は市の多文化共生指針草案作りに際した市民アンケートの実施や外国人市民会議の運営、そして外国人市民の行政サポートや4ヶ国語で発行されている『豊中市生活ガイドブック』の改訂などの業務に携わりました。

そしてもう一つは市民、つまり地域やコミュニティにおける当事者、そして外国人としての青年海外協力隊です。協力隊では中米ニカラグアに派遣され、首都マナグアの最貧困層を支援する現地NGOで、識字教育や保健・衛生指導、図工・手工芸などの情操教育、日本文化の紹介などの活動を行って来ました。

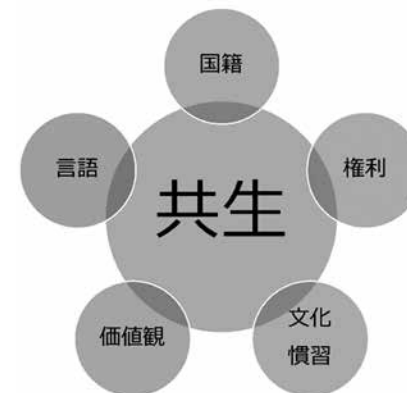
これら異なるふたつの目線から、異文化理解、多文化共生について何度も考える機会を得ることになりました。

7. “外国人”という存在を通して

市役所での多文化共生指針関連の仕事を通して、“外国人”という存在と行政目線で向き合うことになりました。豊中市というのは、住民の1割が昔から日本に住んでいる中国籍・朝鮮籍・韓国籍の方々であったり、

大阪大学の留学生として世界各国の人々が住んでいたり、一見そうは見えないのですが多様な背景の人々が住んでいる地域です。

そこで多文化共生という理想を掲げた政策作りに取り組む中でわかったことは、自治体がサービスを提供するにあたっては、法律や条約、条例などの関係で、サービス対象者が“外国籍”であるか“日本国籍”であるかという点が、重要な意味を持つということでした。「共生」という言葉の周辺には、国籍や言語、価値観、文化・慣習、そしてそれらに付随する権利というものが常に存在しており、実際には“外



国籍”というだけで、日本人とは異なるもの・特別なものとして扱わざるを得ない状況があるのです。

国という枠組みがある限りこうした事情があるのは仕方がないことだと思いますが、こうなってくると、小さな地方自治体ができることは、言語サポートを増やしたり市民への啓発活動をしたりというような行政サービスの枠を超えない補助的なものである、という話になってきます。そして職員は、「外国人市民」とは日本の生活に不便を持った特別な支援が必要な対象者である、という発想を持つこととなります。特に、職員の多くが異文化や異言語体験などを持っていない場合には、「特別な支援が必要⇒“外国人市民”=特別・異質」という図式を持ちやすいのだと思います。こんなことでは、多文化共生とは自治体の負担が増えるばかりの、理想とは程遠いものになってしまうのではないのでしょうか。

8.“外国人になってみて見えるもの”

そんなふうに行行政目線で“外国人”について考える立場から一転して、2013年から2年間、青年海外協力隊として中米ニカラグアの首都マナグアに派遣され、“外国人”として生活することになりました。ニカラグアには日本人が約150人しかおらず、私たちはかなりマイノリティな存在でした。

多くのニカラグア人にとって日本は、TOYOTAやNISSAN、SONYやPanasonicが象徴する身近な国であると同時に、「日本って中国のどこにあるの?」というほどに距離のある場所でした。また、「日本人はネズミを食べる」とか「韓国語も中国語も日本語も同じ」というような誤解もたくさんありました。母国について誤解されているというのは想像以上に傷つく辛いもので、日本人としてのアイデンティティを強く感じることもよくありました。1年目は思うようにスペイン語が話せないで、「話せない=考えがない」ように思われてしまったり、こちらが一生懸命話している途中で聴くのをやめられたり、意見を尊重してもらえなかったり、“外国人”としてその土地に定着する難しさにも直面しました。

それでもニカラグアのすごいところは、外国人だろうが、よくわからない異質な存在であろうが、あまり話せなからうが、日本人の私を異質な



ニカラグアの町並み(地方都市)



異質さを丸ごと受け入れてくれた同僚たち



隊員のUSED靴を寄贈した。



路上生活者の多くは薬物依存があり、皮膚がひび割れている。

まま受け入れてくれたことです。平気でスペイン語で話しかけられたり、文化的差異に特段配慮することなくニカラグア流に物事を進めたり…。初対面の時の挨拶に特徴づけられるように、ニカラグア人にとって、私は単純に「ワカナ」であり相手は「マリア(例)」なのです。私が日本人であり、私にとってスペイン語が外国語であり、私がJICAという団体に所属したボランティアであるということは、私個人に付随する特徴なのであって、そこまで重要視されることはありませんでした。そこには、個人として自身自身の在り方を問われる環境がありました。

ニカラグアの場合、カリブ地域の一部で使用されるミスキート語以外はほとんどの人々がスペイン語を話すため、言語的多様性は低いのですが、他国からの侵略や奴隷として連れてこられた人々の定住など歴史的に人の出入りが多く、多民族間での混血があり、外見的多様性は豊かな社会です。歴史的な結果として個人の背景にある多様性をありのまま受け入れる社会になったのかもしれませんが、一つの多文化共生社会の形がそこにはありました。

9. ひとりのストリートユースとの出会い

ニカラグアで活動する中で痛感したのは、根本的な生育環境や経験の種類、知識、あらゆる基盤が異なる相手とは、全く理解できないこともあるし、認め合うことが難しい場合もあるということでした。私にとって、ニカラグアと日本の間にある文化や社会などの差異よりも、日本で育った私とストリートで育った青年の間の差異のほうがよっぽど深く、越え難いものでした。

配属先のNGOには、路上生活をしている薬物やアルコール依存などの問題を抱えた青少年と、保護者が薬物依存や障害・貧困などの状況にある家庭の学齢男児が通所していました。その中に、施設ができた当初からずっと通ってきている19歳くらいの路上生活の青年がいました。家族はいませんが訳あって小さい時に路上生活を始め、薬物依存があるため今も仲間たちと路上で生活しています。識字指導は施設の職員が時々やっているのですが、自分の名前を書くことと簡単な足し算、引き算はできますが、小学校教育を受けていないためほぼ非識字で、誤解を恐れずに言えば、ほとんど野犬や道に生えている樹々のような環境で育ってきました。

彼のように育ったストリートの人々は、耳から聞いた言葉でコミュニケーションを取っているため、語彙や文法の間違いも多く、ストリート語のような言葉も使います。そのため、スペイン語に詳しくない日本人が彼らと話して意思疎通を図ることは無謀でした。それだけではなく、知識や経験の違いからコミュニケーションがかみ合わないことも山ほどありましたが、そもそも彼らの間でのコミュニケーションスタイルは私が身につけてきたそれとは大きく異なっており、彼がおもしろいと思うことは私が傷つくことだったり、私の意見が彼にとっては意味不明な主張だったり、どうふるまえば良い関係が築かれるのか全く分かりませんでした。薬物等の影響もあって特に怒りのコントロールが難しく、すぐに怒って手を出すこともありましたし、彼らにとって暴言は冗談でした。そのため、こちらが冷静に対応したから関係が良くなるというものでもありません。そんな彼の存在そのものが私にとっては未知で異文化の塊だったため、理解できないあらゆることにイライラし、関わりそのものがストレスだった時期もあり



ある貧困家庭の様子。



施設の青少年と(左端は件のストリートの少年)。

ます。

ニカラグアでの生活やスペイン語にも慣れてきたころ、活動の方向性や職場での自分の在り方にさんざん悩む中で、ようやくGLOCOLで学んだ発想の逆転に至りました。彼の存在をストレスに感じないためには、彼のおもしろいと思うことを私もおもしろい・楽しいと思えるようなになればよいのではないか、という境地に至ったのです。(笑)そこで、自分の行動を彼のふるまいに近づけてみました。日本人らしい気遣いや常識などに固執せず、彼らの好むきつめの冗談を言うようにしてみたり、踊れと言われたときに踊れるようにダンスを習ってみたり、ニカラグア人は家族や友達など親しい人同士ではっきり好意や思いを伝えあう人々なので、そういう感情表現もするようしたり…そうして対極だと思っていた相手に近づいてみることで、ストレスでしかなかった彼との関わりの中に通じ合う何かが生まれてきました。実際には私という個人の本質が変わったわけではなく、彼とシェアできる余白のようなものが増えたのだと思います。同様に、長い時間かけて彼も、私という日本人の女を“おかしな言葉を話すよくわかんない奴”ではなく“日本人のワカナ”という存在として受け入れ、その人格を尊重してくれるようにまですなりました。心の通うコミュニケーションが成立するようになるまでにはおそらく1年以上かかりましたが、この彼との関わり、お互いに存在を認め合うようになったというプロセスこそ、異文化理解の本質なのではないか、とハッとすることを覚えています。

10. 自分なりの答えを探し続けること

“グローバル”という言葉は国境を越えた経済や人の移動を通して解説されがちなので、自分の生活とは遠いもののように感じる人が多いのではないかと思います。“異文化理解”という言葉もよく聞かれるようになりましたが、外国人と関わらないのなら関係ないこと、と思われる方が多いのかもしれない。

しかし、これまでの経験を通して私が気づいたことというのは、国境を越えても越えなくても、そこにいる人々とどうかかわるかというのは、個々人にゆだねられるのだということです。つまり、“グローバル”なかわりだからといって急に特別な思考を必要とするわけではなく、日常における他者とのかわりに対する自分の心持ち如何だということです。

国籍や言語、価値観、文化・慣習などの差異はかわる際の障壁になるときもありますが、そうした違いは単純化すれば、日本人同士で出身地によって方言や文化・慣習、常識すら違うことがあるのと同じです。そ

の差異が大きい場合、根本的に理解しきれないこともあります。しかし、そもそも他者に対して理解できないことがあって当然ですし、理解しきれなくても良いのだと思います。理解できなくても、知り、受け止め、認め合うことができれば、人として向き合い、心に触れるコミュニケーションができます。心に触れるコミュニケーションは、相手と新しく共有できる何かを生み出し、それによって差異を乗り越えて、共に過ごすことができます。

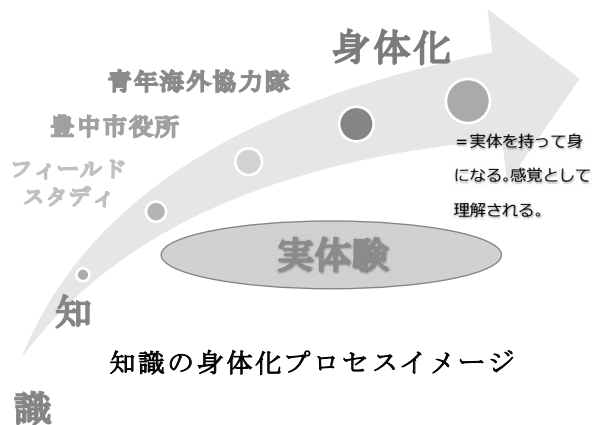
何度も立ち上がってきた「異文化理解とは何なのか」、「多文化共生とは何なのか」、「グローバルってそんなに日常と乖離しているのか?」という問いに対して、実体験を通して見えてきた私の答えというのが、そのようなものです。

11. 知識の身体化

ところで、なぜそれらの問いに何度もぶつかることになったのか、という点について考えてみました。授業内外の様々な場面で、人並み以上に「異文化理解」や「多文化共生」という言葉に触れる機会が多かったにもかかわらず、なぜじっくりく理解が得られぬままだったのでしょうか。そしてなぜ、今頃になってようやく、答えのようなものが見え始めてきたのでしょうか。

振り返ってみると、問いとして立ち上がってくる間はそれらの言葉が私にとって知識でしかなかった、ということなのだろうと思います。つまり、知識や理論として学んできた言葉や概念が、フィールドスタディ、豊中市役所における行政目線での実務、そして青年海外協力隊としての外国人体験を経て、身体を通して、実体を持って理解されるようになった、と考えられます。

このプロセスを勝手に知識の身体化と名付けましたが、これは異文化理解や多文化共生ということに限らず、広く起こっていることなのでしょう。



ニカラグア人は小さな頃から踊るのが大好き。



廃棄物回収の仕事で使われる馬車は、現代でも車と同じように街を往来する。



家族や仲間とのつながりや愛情を大切にす文化は日本人も見習いたい。

そのように考えると、未知なことやすぐにわからないことでも、体験を通して、自分なりに実体をもったこととして受け入れることができるということであり、これは人と人が関わる際にも同じなのだろうと思います。

12. グローバルに壁を感じる前に

最近では、生活の中で海外の様子や“外国人”に触れる機会もどんどん増えていきます。

日本で働いている“外国人”の方々を見かけることも増えましたし、街に出ればどこにでも世界中からの旅行者がいます。ニュースで海外の出来事を耳にしない日はありません。住宅街の中に見慣れない形の建物(例えばモスクのような)ができていたり、世界中の食をレストランで楽しむことができたり、色々な場面で外国語表記を見かけたりすることが増えました。また、学生たちにとって留学は身近なものになりましたし、SNSなどを通して日本以外のことを簡単に知ることができ、グローバルなコミュニケーションが簡単になりました。

一方で、海外に関する情報量が増えるとともに、異文化や社会に対する実体としての理解を欠いたままネット上で言いたい放題言う人たちも多くおり、日本人に深く根付いている「外国=異質・特別」といった意識は今も消えていないような気がします。そうした考え方で、「A国だからC」、「B教だからD」という安直な答えを出してしま

うと、本当に大事なことを見失ってしまうと思います。

国と国との関係の中で、国籍によって異なる扱いや理解をしなければな

らないこともあります。しかし、様々な制約の中で異文化理解や多文化共生を実践するのは一市民としての個人です。そして個人レベルで考えたとき、当事者にとってのグローバルなコミュニケーションとは、目の前の他者とどうかかわるかということに尽きます。言語の壁はあっても、一人の人間として、お互いを尊重して向き合うことが大切であり、その先には国籍や宗教、文化・慣習などを越えた、共有可能な部分があるはず。一人ひとりの市民の中にそういう感覚が広がっていけば、おのずと、その社会や文化は多様性を受け入れる方向に変容していくのではないのでしょうか。

13. 終わりに

今回のプレゼンテーションを通して最も伝えなかったことは、グローバルという言葉にとられるのではなく、国籍や宗教、文化・慣習の違いに配慮しすぎるのでもなく、目の前の相手と認め合える関係を築こうと努力することが、結局はグローバル社会で必要とされることなのではないか、ということです。そうしたことを一つ一つ真剣に考えなくてもあつという間に物事が進んでいってしまう、便利でスピード感のある現代社会だからこそ、大学やGLOCOLのような組織には、学生の眼や耳や心を育てる教育を期待したいと思います。

—これまでの感謝に代えて